

ベニグノ・アキノ前大統領と日比和解

NIDS コメンタリー

研究幹事 庄司 潤一郎

第 196 号 2021 年 10 月 26 日

はじめに

去る 6 月 24 日、フィリピンのベニグノ・アキノ前大統領（Benigno Simeon Cojuangco Aquino III＝アキノ三世）が死去した。享年 61 歳であった。2010 年から 2016 年の大統領在任期間中、経済政策に尽力し、毎年 7 パーセント近くの GDP（国内総生産）成長率を達成した。また、飾らない人柄は、「ノイノイ」（Noynoy）の愛称で親しまれた。

一方、大統領として南シナ海問題で対立する中国には毅然とした態度を取り、2013 年常設仲裁裁判所（オランダ・ハーグ）に国連海洋法条約に違反するとして提訴した。退任後の 16 年 6 月、同裁判所は中国の主権主張を退ける裁定を下し、「中国に勝った『静かな』大統領」（『産経新聞』2021 年 6 月 30 日）と評されたのであった。

日比関係では、アキノ前大統領は、集团的自衛権の行使を容認した安倍晋三政権の閣議決定を支持し、中国の軍事的台頭を念頭に、南シナ海における海上自衛隊とフィリピン海軍の共同訓練実施、防衛装備品・技術移転協定の締結、巡視船の提供など日比両国間の安全保障協力の強化に努めた。

加藤勝信官房長官（当時）は、記者会見で、「アキノ前大統領は、フィリピンの経済発展に尽力されるとともに、日本との関係を『戦略的パートナー』に押し上げるなど、両国関係の強化にも貢献された。フィリピンの民主化に貢献されたコラソン・アキノ元大統領とともに、親子二代にわたって大統領を務められた功績は、末永く語り継がれると考えている。改めて謹んでご冥福をお祈りしたい」と哀悼の言葉を述べたのである。

しかし、アキノ家も巻き込まれた戦争・占領といった日比間の暗い「過去」をめぐる和解に対するアキノ前大統領の貢献は、ほとんど注目されることはない。そこで、本稿では、日本の皇室とアキノ家の関係にも言及しつつ、アキノ前大統領の日比和解に果たした貢献について述べたい。

1 昭和天皇とコラソン・アキノ

大東亜戦争のフィリピンにおける日本人の犠牲者数は、約 51 万 8000 人（兵士：約 49 万 8600 人）で、単一の戦域としては中国戦場を凌駕して最大である。他方、フィリピン人の犠牲者数は、全人口の約 7% に当たる約 111 万人と言われる。

日本・フィリピン両国ともに甚大な人的被害が生じたため、戦後当初はフィリピンの日本に対する国民感情は、きわめて厳しいものがあつた。

その後、徐々にフィリピンの対日感情は、憎しみから赦しへと変化していったが、さらに、それを促進し、大きな転換点となったのが、1962 年 11 月の皇太子御夫妻（現在のの上皇・上皇后両陛下）による昭和

天皇の名代としてのフィリピン御訪問であった。

厳しい反日感情が憂慮されたが、懸念とは逆に想像以上の大歓迎を受けたのであった。沿道には、ドワイト・アイゼンハワー大統領やダグラス・マッカーサー元帥を迎えた時と同様に、市民約 10 万人が繰り出し、現地紙は、「両国の関係は新しい世紀を迎えるであろう」（『マニラ・デイリー・ブリテン』）、「日比両国間に友好の新時代を開くに違いない」（『フィリピン・ヘラルド』）と伝えたのであった¹。

一方、アキノ前大統領は、皇太子御夫妻のフィリピン御訪問とほぼ同じ時期の 1960 年 2 月に、ベニグノ・アキノ・ジュニア（Benigno Simeon Aquino, Jr.）とコラソン・アキノ（Corazon Conjuangco Aquino）の長男として生まれた。父のベニグノ・アキノ・ジュニアは、1932 年 11 月ベニグノ・アキノ（Benigno Simeon Aquino＝アキノ一世）の長男として生まれ、戦後上院議員となり、「ニノイ」（Ninoy）の愛称で親しまれ、フェルディナンド・マルコス大統領の独裁政治と闘ったが、1983 年 8 月マニラ空港で暗殺された。

夫の暗殺後、妻のコラソン・アキノがマルコスに対する反対運動の中心となり、1986 年の「ピープル・パワー革命」（二月革命）でマルコス政権を打倒、フィリピン初の女性大統領に就任した。

コラソン・アキノ大統領は、1986 年 11 月に国賓として来日したが、その際、昭和天皇との会見における天皇の戦争責任に関する発言をめぐる問題が生じた。フィリピンの報道官が、会見において天皇が何度も謝罪したと発表したのである。後藤田正晴官房長官は、事実関係を全面否定し、『昭和天皇実録』にも、以下のように記述されている²。

「なお、この日の御会見において、天皇が大統領に対し第二次世界大戦に関して数度にわたり謝罪をしたとする内容が、フィリピン国の報道官の談として報道されたが、日本側はこれを否定した。」

一方、謝罪の事実を認めた関係者の間でも、その謝罪の対象について見解が分かれている。通訳を務めた真崎秀樹氏は、日本軍がフィリピンの人々に迷惑をかけたことを繰り返し謝ったと述べている³。

また、会見に唯一人立ち会った安倍勲式部官長は、国民全体に謝するという文脈ではなく、戦争中国民議会議長であった大統領の義父のアキノ一世の一家に対して、気の毒なことをしたとの意味であるとしている⁴。

2 大東亜戦争とベニグノ・アキノ(アキノ一世)

1941 年 12 月 8 日に大東亜戦争が勃発し、翌 42 年 1 月日本軍はマニラを占領した。軍政が実施されたが、軍政下で設置されたフィリピン行政委員会の内政長官に就任したのが、アキノ一世である⁵。

その後アキノ一世は、1942 年 12 月に結成された「新比島建設奉仕団」（カリバピ＝KALIBAPI）の副総裁兼事務総長に就き、日本軍への協力を国民に呼びかけた。東条英機総理大臣が帝国議会においてフィリピンの独立に言及するなど、早い時期から将来の独立を視野に入れた検討がなされ、1943 年 6 月フィリピン独立準備委員会が発足した。アキノ一世は、同委員会副委員長になり、委員長のホセ・ラウレル

¹ 『毎日新聞』1962 年 11 月 8 日・11 日。

² 宮内庁『昭和天皇実録 第 18』東京書籍、2018 年、408 頁。

³ 真崎秀樹『側近通訳 25 年 昭和天皇の思い出』読売新聞社、1992 年、38－39 頁。

⁴ 昭和塾塾友会『回想の昭和塾』西田書店、1991 年、180 頁。岩見隆夫『陛下のご質問－昭和天皇と戦後政治』毎日新聞社、1992 年、139－143 頁。

⁵ アキノ一世の生涯については、ニック・ホアキン（鈴木静夫訳）『アキノ家三代－フィリピン民族主義の系譜－上巻』勁草書房、1986 年、第 2 部を参照。

(Jose Paciano Laurel) らとともに 1943 年 9 月来日、昭和天皇に謁見、東条総理とも会見を行っている。この時、天皇から、ラウレルは勲一等旭日大綬章、アキノ一世は勲二等瑞宝章を授与された。

1943 年 10 月 14 日、ビルマに遅れること 2 か月、フィリピン第 2 共和国として独立が宣言され、日比同盟条約が調印されるにいたった。ラウレルが大統領に選出され、アキノ一世は国民議会議長に就任した。翌 11 月大東亜会議が東京で開催され、ラウレル大統領も、フィリピンを代表して参加した。

1944 年 4 月、アキノ国民議会議長は、フィリピンの答礼特派大使として来日、昭和天皇に謁見し、独立と日比同盟条約に対する謝意を記したラウレル大統領の国書を俸呈した。さらに天皇による午餐も催され、東条総理も晩餐会を挙行了した。

しかし、独立にもかかわらず、日本の占領に対する不満は、民心の離反を招き、ひいては抗日ゲリラの拡大をもたらすことになっていった。ラウレル大統領は、以下のように日本の占領を批判している⁶。

「率直に云ひ日本は比島人の心理をつかむに失敗せり。其掲ぐる理想は我等の共鳴措く能はざるものなるも、其行ふ所は民衆の生活を顧みず、却て之を不安ならしめ軍に対する不満不公平の声は漸を追って全国に瀰漫す」

アキノ国民議会議長も、「西班牙（スペイン）時代を再現したるが如し。而も西班牙は名目だけでも裁判制度を有したるに、日本の憲兵は相手の何人なるやを問はず、其意の欲する俛に振舞ふ。これじつに日本の比島政治史上印したる失敗の大なるものなり」と述べていた⁷。

その後戦局が悪化すると、1944 年 12 月アキノ国民議会議長は、ラウレル大統領らとともにマニラを脱出、台湾を経て、45 年 6 月日本へ「亡命」し、奈良ホテルに滞在した⁸。

6 月 28 日、ラウレル大統領は昭和天皇と会見を行ったが、アキノ国民議会議長は、その際天皇に謁見している。

終戦を受けて 8 月 17 日、ラウレル大統領は、フィリピン第 2 共和国の解散を奈良で宣言した。9 月 15 日に連合国軍は、ラウレル前大統領、アキノ前国民議会議長らを逮捕、横浜拘置所、のち巣鴨拘置所に収監した。

1946 年 8 月 25 日、ラウレルやアキノら一行は、米軍機で帰国、モンテンルパの刑務所に收容された。その後、アキノは、対日協力の罪で訴追され、政界に復帰することなく、1947 年 12 月 20 日に 53 歳で失意のうちに病死した（ちなみに、ラウレルは、翌 48 年 4 月大統領の恩赦で赦免）。

3 「過去」を克服した日比和解

さて、2009 年 8 月コラソン・アキノが病死したのち、アキノ前大統領は、母の遺志を継いで大統領選に出馬、2010 年 6 月当選を果たし、第 15 代大統領に就任した。

2015 年 6 月には、アキノ大統領は、国賓として来日した。大統領を迎えた天皇陛下は、宮中晩さん会において、以下のように述べられた。

「先の大戦においては、日米間の熾烈な戦闘が貴国の国内で行われ、この戦いにより、多くの貴国民の

⁶ 福島慎太郎編『村田省蔵遺稿 比島日記』原書房、1969 年、431 頁。

⁷ 同上、699—700 頁。

⁸ アキノ一世（国民議会議長）の「亡命」及び日本での滞在については、「ラウレル亡命」読売新聞社編『昭和史の天皇 13』読売新聞社、1970 年、「奈良ホテル」読売新聞社編『昭和史の天皇 14』読売新聞社、1971 年、及び山口由美『消えた宿泊簿—ホテルが語る戦争の記憶』新潮社、2009 年を参照。

命が失われました。このことは私ども日本人が深い痛恨の心と共に、長く忘れてはならないことであり、とりわけ戦後 70 年を迎える本年、当時の犠牲者へ深く哀悼の意を表します」

陛下は、これまでフィリピン大統領を迎えた過去 2 度の晩餐会（1993 年 3 月フィデル・ラモス大統領、2002 年 12 月グロリア・アロヨ大統領）では、戦争に言及されたことはなく、今回が初めてであった。

一方アキノ大統領は、「過去に経験した痛みや悲劇は、相互尊重、尊厳、連帯に根ざした関係構築に努めるという貴国の約束によって、癒されてまいりました」と述べた。さらに、衆参両院合同会議における演説でも、「貴国は、過去の傷を癒す義務を果たす以上のことを成し遂げ、真に利他的な意志をもって行動しました」とまで言及したのであった。

アキノ大統領の考えの根底には、「戦後、フィリピンに本当の友情を示してくれた戦略的パートナー国が二つ存在した。それがアメリカと日本だった」といった認識が存在していたのである⁹。

また、訪日時両国間で出された「日比共同宣言」（2015 年 6 月 4 日）には、以下のように記されていた。

「この 70 年間の歴史は、ある二つの国の国民が、過去の問題を乗り越え、強固な友好関係を構築するに当たり、そのたゆみのない努力によって顕著な成果を達成し得ることを世界に示している」

戦後日比両国は、大東亜戦争下の日本軍の行為に起因するフィリピンにおける苦い過去を乗り越え、新たな協力関係を築き上げることによって、和解のモデルを世界に示したのであった。

現在のフィリピンの人々も、大東亜戦争において甚大な被害を受けたにもかかわらず、日本に対して好感情を抱いている。

例えば、シンガポールの ASEAN 研究センター（ISEAS）が、2018 年にアセアン諸国の識者に行った各国の信頼度に関する意識調査で、全体では世界の中で日本が最も信頼されており、（65.9%。EU=41.3%、米国=27.3%）、フィリピンに関しては、ASEAN で第 2 位の高さ（82.7%。第 1 位は 87.5%のカンボジア）であった。このフィリピンの結果について、「戦争の記憶」は最早日比間のアキレス腱（弱点）ではないと分析されていた¹⁰。

当時、このようなフィリピンの姿勢に、戦争中同様に多大な被害を受けた中国は、驚きをもって受け止めていた。例えば、中国メディアの『新浪』は、日比首脳会談直後の 6 月 10 日に、「なぜフィリピンは第二次世界大戦における日本軍の罪行を過去のものとして、咎めないのか」と題する論説を掲載していたのである¹¹。

中国や韓国など東アジアの諸国に対しては、フィリピンをはじめとする東南アジア諸国以上に謝罪等がなされてきたにもかかわらず、現在にいたるまで和解を達成しているとは言い難いなか、アキノ前大統領の発言が、いかに画期的なものであったかを物語っている。

⁹ アキノ前大統領の国際情勢認識については、ベニグノ・アキノ「成功をいかに未来につなげるかーベニグノ・アキノ・フィリピン大統領との対話」『フォーリン・アフェアーズ・リポート』2014 年 11 月号、「フィリピン・アキノ大統領インタビュー 国際社会は中国の力づくの現状変更を許すな」『中央公論』2015 年 1 月号などを参照。

¹⁰ “Survey Report: “State of Southeast Asia: 2019,” *ASEAN FOCUS* 26(January 2019), pp. 6-16, <https://www.iseas.edu.sg/articles-commentaries/aseanfocus>

¹¹ <http://news.sina.com.cn/w/zg/gjzt/2015-06-10/19111128.html>

4 上皇陛下とアキノ前大統領

天皇皇后両陛下は、2016年1月、国交正常化60周年の国際親善と慰霊を目的として、天皇として初めてフィリピンを御訪問された。

これまでも御招待はなされてきたが、戦争の「過去」の記憶もあり、実現していなかった。そのため、ASEANの原加盟国（5か国）の中で唯一残された陛下の最期の御訪問国であり、両陛下の強い決断で、御訪問は決まったと言われている¹²。そこには、天皇として、「やり残していた務めをまた一つ果たせるとのお気持ち」（側近）があった¹³。

一方、御訪問は、2015年6月に来日したアキノ大統領が両陛下の御訪問を招待したことを契機としていたが、招聘からわずか7か月の実現は極めて異例であった。その背景には、安倍晋三総理大臣にも直接要望するなど、アキノ大統領の強い意向があった¹⁴。

ちなみに、上皇陛下とアキノ前大統領の関係は約30年前に遡る¹⁵。母であるコラソン・アキノ大統領が、1986年11月に国賓として来日した際、アキノ前大統領も同行した。アキノ前大統領は、昭和天皇から直接、「母である大統領をよく助け、フィリピン国の繁栄のために頑張ってもらいたい」旨の御言葉がかけられた¹⁶。

さらに、宮中晩餐会において当時皇太子であった上皇陛下に初めて出会った。その時、陛下は、3年前に父を暗殺されたことを気につけ、いたわったと言われる。さらに、陛下の長男である浩宮さま（現在の天皇陛下）とアキノ前大統領は、同じ1960年2月生まれであった¹⁷。

その後、大統領就任後、訪日の度に（例えば、2011年9月の公式実務訪問、2014年6月国際会議出席のための広島訪問）、陛下と交流を深められ、宮内庁幹部によると、「陛下を父のように慕っているように映る」とまで評された¹⁸。

2015年6月、国賓として来日したアキノ大統領は、陛下と再会されたが、その時の様子は、「まるで家族のような雰囲気だった」（宮内庁幹部）と言われる¹⁹。

さて、マニラでの晩餐会において、天皇陛下は以下のように述べられた。

「この戦争においては、貴国の国内において日米両国間の熾烈な戦闘が行われ、このことにより貴国の多くの人々が命を失い、傷つきました。このことは、私ども日本人が決して忘れてはならないことであり、この度の訪問においても、私どもはこのことを深く心に置き、旅の日々を過ごすつもりでいます」

この文言は、これまでのアセアン諸国への御訪問（タイ、マレーシア、インドネシア）に際しての御言葉が、「先の誠に不幸な戦争の惨禍を再び繰り返すことのないよう平和国家として生きることを決意し、この新たな決意の上に立って、戦後一貫して東南アジア諸国との新たな友好関係を築くよう努力してき

¹² 河相周夫「天皇皇后両陛下フィリピン随日記」『文藝春秋』2016年5月号、196頁。

¹³ 「皇室ダイアリー No.323 比訪問 やり残した務め」『読売新聞』2015年10月25日。

¹⁴ 「クローズアップ2016：両陛下比訪問 国交60年、慰霊後押し 招聘後わずか7カ月」『毎日新聞』2016年1月27日。

¹⁵ 皇室とアキノ前大統領との関係については、六辻彰二「日本とフィリピンを結んだアキノ前大統領－皇室との交流が開いた新地平」（<https://www.newsweekjapan.jp/mutsuji/2021/06/post-118.php>）も参照。

¹⁶ 宮内庁『昭和天皇実録 第18』410頁。

¹⁷ 「皇室：両陛下フィリピン訪問 2代のアキノ大統領と天皇陛下、家族のように関係深め」『毎日新聞』2016年1月27日付夕刊。

¹⁸ 同上。

¹⁹ 同上。

ました」といった、戦後日本の平和主義の歩みを強調する未来志向であったのに比べ、趣を異にした一歩踏み込んだ表現となっていた。

一方大統領は、先ず、「こうした歴史の上に、両国は以前よりもはるかに揺るぎない関係を築いてきました。貴国は堅実で有能かつ信頼できるパートナーとして、今日まで我が国民の発展を後押ししてくださっています。・・・貴国から受けたすべての恩恵に対し、フィリピン国民を代表して、貴国の言葉で『どうもありがとうございます』と申し上げます」と述べた。前年の日本訪問時に続いて、重ねて日本に対する感謝の意を表したのであった。

ついで、以下のように述べた。

「私が天皇皇后両陛下にお目にかかるのはこれが四度目となります。最初は 1986 年に私の母の日本訪問に同行したとき、その後は私が大統領として貴国を訪れた際です。お目にかかるたびに感銘を受けるのは、両陛下が示される飾り気のなさ、ご誠実さ、そして優美さです。両陛下が今日までいかにして責務や義務を果たされ、多大な犠牲を払われてきたのかを思うと、誰もが感嘆せずにはいられません。そしてそのすべては、さまざまな関係を立て直してさらによいものにしていききたいという、ご生涯をかけた献身の一環をなすものである。貴国の象徴として、善意を体現する存在として、天皇皇后両陛下がいかなる困難を担われてきたのか、私には想像することしかできません。私が大統領の座に就く際には、任期中に限っては自身を犠牲にしなければならないということを十分承知して、国民から負託されたこの職務を引き受けました。その私が両陛下にお会いして実感し、畏敬の念を抱いたのは、両陛下は生まれながらにしてこうした重荷を担い、両国の歴史に影を落とした時期に他者が下した決断の重みを背負ってこられねばならなかったということです」

一般に、晩餐会での挨拶は、両国間関係の歴史や現状、未来について触れることが一般的であるが、両陛下の人柄について自身の言葉でこれほど多くを割くのは極めて異例であり、陛下とアキノ前大統領との特別な関係を象徴していた。

特に、アキノ前大統領は、両陛下の「過去」に真摯に向き合う姿勢に感銘を受け、「畏敬の念」を抱き続けていたのであった²⁰。

両陛下に対する接遇も異例であった。フィリピンでは国賓の場合、大統領は歓迎式典、晩餐会などマラカニアン宮殿の行事のみ出席するのが慣例であるが、今回は、空港の送迎、大使公邸のレセプションなど 5 日間の滞在中ほぼ毎日行動を共にされたのであった²¹。

おわりに

アキノ前大統領の対日外交をめぐることは、中国を念頭に置いた日比両国の安全保障の強化、及びその協力の促進を目的としていると批判的に語られ²²、その文脈でベトナム御訪問同様、天皇の政治利用であるといった指摘もなされている。

しかし、本稿で考察したように、両陛下とアキノ前大統領の関係は、そういった政治や経済の次元を超

²⁰ 上皇皇后両陛下の「過去」に対する姿勢とフィリピンとの和解については、庄司潤一郎「上皇皇后両陛下のフィリピン御訪問－『慰霊の旅』の集大成として－」『NIDS コメンタリー』第 98 号（2019 年 6 月 6 日）を参照。

²¹ 河相「天皇皇后両陛下フィリピン随記」205 頁。

²² 「フィリピンの自衛隊基地構想！」『サンデー毎日』2015 年 6 月 28 日号など。

えたものであった。

戦後日比両国は、大東亜戦争下の日本軍の行為に起因するフィリピンにおける厳しい感情を、お互いの「赦しと謝罪」の好循環によって克服、良好な関係を築き上げてきた²³。両陛下のフィリピン御訪問はその集大成であり、日比両国は「新たなステップ」（リカルド・ホセ フィリピン大学教授）に入ったのであった。

アキノ前大統領の人柄と尽力なくして、両陛下のフィリピン御訪問、そして両国間の和解の集大成は達成し得なかったであろう。その意味で、前大統領の貢献は大きいものがあった。

本年は、日本とフィリピンの国交正常化 65 周年、戦略的パートナー10 周年に当たり、菅義偉総理大臣（当時）は、7 月ビデオメッセージにおいて、「日本とフィリピンは、自由、民主、法の支配といった普遍的価値を共有する戦略的パートナーであり、両国関係は『黄金時代』を迎えています」と述べていたのである。

(2021 年 10 月 19 日脱稿)

プロフィール

profile

研究幹事

庄司 潤一郎

専門分野：近代日本軍事・政治外交史、
歴史認識問題

本欄における見解は、防衛研究所を代表するものではありません。
NIDS コメンタリーに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。
ただし記事の無断転載・複製はお断りします。

防衛研究所企画部企画調整課

直 通：03-3260-3011

代 表：03-3268-3111（内線 29177）

F A X：03-3260-3034

※ 防衛研究所ウェブサイト：<http://www.nids.mod.go.jp/>

²³ 戦後の日比間の和解をめぐる歴史については、中野聡「追悼の政治—戦没者慰霊をめぐる第二次世界大戦後の日本・フィリピン関係史」池端雪浦、リディア・N・ユー・ホセ編『近現代日本・フィリピン関係史』岩波書店、2004 年を参照。